The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	基調講演
Author(s)	吉富, 志津代
Citation	GLOCOLブックレット. 2016, 18, p. 72-85
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/55582
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

3-2
基調講演

吉富志津代 大阪大学グローバルコラボレーションセンター特任准教授

こんにちは。あらためまして吉富です。今日は大阪府内では、明日の選挙にむけてばたばたしていて、声をおかけしたら行政の方たちには「ごめんなさい」と言われてしまう日なのに、多くの方に来てくださいました。本当にありがとうございます。

GLOCOL連続セミナーの第1回目、「アジアの課題と大学の知」が11月19日に行われました。本日の第2回目のセミナーは「足もとの国際化と大学」をテーマに行います。第一回目は、国際協力グループが担当しました。今回は、グローバル共生グループの担当でおこないます。国際協力グループのセミナーのときには「グローバルな課題に、ローカルな視点で」ということをおっしゃっていました。こちらはその逆の「ローカルな課題に、グローバルな視点で」ということになるかと思います。両方とも方向性が一方通行ではなく、二つの道筋というのは大切な視点だと思います。

先ほど紹介してくださったように、私自身は実践者という立場としてGLOCOLの教員になり、今年で5年目になります。私自身がいろいろな団体でずっと経験してきたことや現場でつちかったネットワークを、教育の現場で伝え、研究という切り口で広げていくことが、教育・研究と実践の相乗効果を生み出している。そういう気がします。振り返ってみると、私がしてきたこと、もしくはGLOCOLとグローバル共生グループで取り組んできたことは、教育と研究、実践をつなげ、一石三鳥、あるいは一石四鳥で、いろいろなものを結んでいく、それによって縦横無尽にいろいろなつながりができていくということだったと思っています。

今日はその全てをご報告することは時間の関係で難しいのですけれども、いくつかご報告させていただきます。パートナーとしていっしょに活動に関わってくださった方も何人か来てくださっているので、あとでそういう方の声も聞かせていただきたいと思います。

今日のお話なのですが、GLOCOLのグローバル共生グループが取り組んできた社学連携における行政やNGOとの連携についてお話ししたいと思います。その活動事例として、司法通訳翻訳というプログラムのなかでの大学と行政の連携や、NGOや国際交流協会とGLOCOLのいろいろな協働について紹介したいと思います。また、社学連携を通じてGLOCOLのグローバル共生グループで主に取り組んできた活動として、被災地の支援―東日本の震災後の支援ですとか、フィリピンの台風の支援ですとか―とネットワークづくりについてお話しします。ミックスルーツ・ジャパンの須本エドワードさんと主に進めてきた「足もとの国際化連続セミナー」についても触れます。そしてグループでとりくんできた共同研究として大学の社会貢献についてなど、あとでみなさんといろいろな意見交換をできたらいいなと思います。社会貢献について私たちがいろいろ先駆事例を聞いてきた話のご紹介もしていきたいと思います。

1. 社学連携の取り組み――行政とNGOとの連携

さっそく、GLOCOLのグローバル共生グループが取り組んできた社学連携における教育・活動の事例として、いろいろあるうちの二つを紹介したいと思います。一つは、GLOCOLが企画をしている高度副プログラムのうちの一つ「司法通訳翻訳」です(写真1)。

近年、日本にも多くの外国人、様々な国々からの人々が滞在し、居住しています。そのなかで、そうした人々が、日本語を十分に理解できないままに、司法手続きや行政手続きなどに臨むケースも増えており、刑事、民事、家族、少年など、司法手続に通訳が必要な現場があります。そうした場面で通訳翻訳人が必要とされているという背景があります。

通訳翻訳人を努めるには、言語だけではなく、法律や行政に関する専門的知識も必要になります。司法通訳翻訳の養成は、まさに「足もとの国際化」という課題に関係するものですが、この課題に対応するためには大学内のさまざまな部局が、学外の組織と連携しなくてはなりません。そこで、GLOCOLでは、大阪大学内の法学研究科、言語文化研究科のほかに、法務省、大阪府警、弁護士会などいろいろな人たちと連携して、司法通訳翻訳人の養成するプログラムを運営してきました。

写真1　大阪地方検察庁における模擬取り調べと通訳実習

このプログラムの特徴として、三つのオムニバス科目があります。大阪府警からの講師が様々な警察活動について講義する科目、大阪法務局人権擁護部、大阪保護観察所、大阪刑務所、入国管理局関西空港支局、大阪地方検察庁からの講師が講義する科目、さらに、大阪弁護士会に所属する弁護士が、難民や入管、結婚や離婚、労働など、グローバル化時代の弁護実務について講義する科目です。これらの科目では、司法通訳翻訳が必要となる現場で働く方たちが、専門的知識をもつ通訳人、翻訳人を要請するためにわざわざ大阪大学に来てくださって講義をしてくださっているのです。

これらの科目を含む司法通訳翻訳プログラムは、大阪大学が大阪外大と合併してからずっと続いていて、ほかの大学院にはなかなか実現していない授業だといわれていて、とても画期的な取り組みだと思っています。高度副プログラムは、「司法通訳翻訳」外国語学部と法学部をもつ国立大学である大阪大学ならではの社学連携の取り組みだと言えるでしょう。

GLOCOLでの社学連携、とくに行政機関との連携で重要なのは、阪大のキャンパスがある地域では、吹田市国際交流協会、箕面市国際交流協会、とよなか国際交流協会がそれぞれ活発な活動をされているということです。GLOCOLは、地域の国際交流協会と連携して様々な教育・実践活動を行ってきました。例えば、吹田市国際交流協会には、学生をインターンとして受け入れていただいています。「グローバル共生実践演習」という授業では、学生で外国にルーツをもつ子どもたちの学習をサポートし、現場で学んだことを報告するということを行っています。こうした社学連携において教育・実践を結びつける試みの中でも、とくに、吹田市国際交流協会とGLOCOLの連携による「ハロハロスクウェア」に関しては、あとで詳しくお話がきけると思います。

社学連携における教育・活動の二つ目の柱として、多くのNPOやNGOとの連携があります。今日もヒューライツ大阪の藤本さんが来てくださっています。ヒューライツ大阪と連携しいくつかの連続セミナーをしました。そのなかで、ここに紹介するのはそのうちの一つなのですけれども、「外国人住民はコミュニティ放送の運営に参画できない！？」というタイトルで、ライブとパネルディスカッションをしました。そうした形で「これはおかしいのではないですか」ということをみなさんに知っていただく、みんな一緒に考えることが目的でした。

本日は、GLOCOLの活動に協力していただいたNPOの代表として、関西NGO協議会の方にもおこしていただいています。関西NGO協議会には、私たちGLOCOLがアドバイザー的な賛助会員の位置づけでメンバーにも入らせていただいています。関西NGO協議会といっしょにかかわらせてもらったものとして、大学とNGOの連携に関する調査および促進活動があります。その中で、大学との連携活動を実施するにあたって、関西NGOの方に、NGO側の意見として「やりにくくなかったか」とか「何が課題だと思うか」「なぜ進まないのか」とかを聞き取ったのです。連携することでNGOにとって負担になっていることもあったり、大学がどんなふうに動いてくれるのかの情報が少なかったり、大学への信頼や期待―「大学は本当に何かしてくれるのかしら」とか―が低いとかなどの意見を聞きました。私自身も自分がNGOの立場だった時にいろいろな調査で研究者がヒアリングにこられたりして、「それが私たちにとってどんなインセンティブがあるのか」と考えた時期もありました。なかなか難しい奥の深い問題だとは思います。

2. 被災地支援とコミュニティ防災

これまでGLOCOLが行政やNPOと協力して教育と社会貢献を結びつける活動を行ってきたことをお話ししてきました。これを踏まえて、GLOCOLが行ってきた社学連携の大きなテーマである、防災・被災地支援と足もとの国際化に関する活動についてお話ししたいと思います。

私はGLOCOLに教員に着任したのは、2011年の2月でしたが、その後、3月に東日本大震災がおこりました。すぐに、NPOと連携し、被災地支援との活動に直結する形で活動を始めました。そして、その後も多文化共生社会における防災をテーマに、主に三つの目的をもって活動をしてきました。一つ目は情報の多言語化に関する活動、二つ目は、住民参加の災害ラジオやコミュニティラジオの活動、ネットワークづくり、そして三つ目は移民コミュニティのエンパワーメントという柱です。そのときの経験やいろいろなネットワークや動きは、大阪大学出版会で『グローバル社会のコミュニティ防災―多文化共生のさきに』という本に書かせていただきました。

被災地との連携やさまざまな活動で―もちろん救援活動ということではなく被災後のいろいろな復興や復旧―にずっとかかわってきました。被災地の支援に関しては、わたしたち教員がNPOやNGOといっしょに活動するだけではなく、学生たちにもこういったことにしっかりとかかわってほしいと思ってきました。具体的には、大学内もフィリピン語、フィリピン研究などに関わっている学生を中心とした学生たちと気仙沼や大船渡に出かけていきました。現地では、被災したフィリピンの女性たちのグループと連携し、できることはなんでもするという姿勢でサポートをしてきました。

GLOCOLの被災地支援への取り組みは、海外にも展開しました。フィリ

ピンのレイテで、台風ハイアンによる甚大な被害が生じた際に、学内のフィリピン語専攻の学生が義援金を集める活動を支援しました。学生のイニシアチブで始まった活動を、被災地であるタクロバンの東ビサヤ大学と連携し、現地につなぎました。こうしたつながりは、その後、災害時に大学にいったいどういうことができるのかを日本とフィリピンの交流を通じて学習する機会へと発展していきました。

こうした活動に取り組むことは、学生にとっても、東北の、そしてレイテの、被災をしてしまったフィリピンの人たちがどんな状況にあって、同じ被災をした中でどんなことがおこっているのか、そのようなことをしっかりと自分の目でみて、自分たちに何ができるのかを考えるという機会にもなったと思います。

また、GLOCOLは継続してインドネシアでのコミュニティ防災促進活動に関ってきました。インドネシアのムラピ火山の噴火地域で、FMわぃわぃ［神戸市長田区の多言語・多文化な番組構成のコミュニティラジオ局］というNPO—私も代表理事を務めているのですけれども—が、現地のNGOのコンバインと連携してJICAの草の根技術協力事業をずっとすすめています。そのテーマが「コミュニティ防災」です。このプロジェクトに連動して、GLOCOLでは、海外体験型教育プログラムを実施しています。具体的にはフィールドスタディとして、毎年私が阪大の大学院生を引率して現地に連れて行っています。こうしたプログラムでは、NGOが長いプロジェクトで築いた信頼関係のなかでしか学べないことを学べるようになっています。このことは、教育的に大変有意義なものと思います。また、大学生が村に行くこと自体も村の人にとってもモチベーションアップになる、新たな視点をインプットできることもあります。私自身もいろいろな調査研究などをするときの拠点にしているという連携をしています。

この被災地の活動のネットワークづくりの集大成として、2015年の3月14～17日に仙台で開催された国連世界防災会議に参加し、GLOCOLの主催でパブリックフォーラムを開催しました。ここには、これまでのつながりからインドネシア、フィリピン、東日本、神戸の被災地の人などが集まりました。また、公募を通じて阪大生に参加を呼びかけました。参加した学生たちは、パブリックフォーラムでパネル発表を行ったり、本会議に参加しました。国連世界防災会議への参加は、GLOCOLと被災地の人々やNGOとの情報共有や意見交換の場となり、そこからさらに新たな活動へとつながっていきました。[1]

写真2　第3回国連世界防災会議にてGLOCOLが主催したパブリックフォーラムにおける学生のパネル発表の様子

このようにNPOや海外の大学と連携し、防災や被災地支援をつうじて教育・実践活動を行うということは、GLOCOLで当初から計画されていたことではありません。東日本とレイテの災害を偶発的な出来事を契機として、さまざまな活動に取り組み、それらへの学生の参加を促すというかたちで進んできました。それらが、また、さまざまなつながりを生み、さらに新たな活動に繋がっていったのです。

3.「足もとの国際化」連続セミナー

GLOCOLが行ってきた社学連携のもう一つの大きなテーマとして、「足もとの国際化連続セミナー」があります。これについては、のちほど私が須本エドワードさんとしてきたことの紹介のために対談をしますので、その際にもう少し詳しくその課題や成果などをきいてみたいと思います。須本エドワードさんとは、みなさんのお手元に配った1枚の国立民族学博物館の情報誌に2008年に私が彼を紹介した記事を書いた頃からのおつきあいです。2008年なので数えたら彼との関係は8年になります。5年前私がGLOCOLの教員になってから連携をしてこのセミナーを続けてきました。その「足もとの国際化連続セミナー」は私が教員になる前からおこなわれていたのですけれども、NGOの立場でGLOCOLと一緒に関わっていました。タイトルだけをあげてみました（表1参照）。2010年からはずっと彼とミックスルーツに関する活動をやってきました。このことの意味はのちほどお話したいと思います。

また、GLOCOLは、ワールドキッズコミュニティ［外国にルーツを持つ青少年のエンパワーメント活動をするNGO］と海外のNGOと連携し、外国にルーツをもつ子どもたちの言語形成に関する活動を行ってきました。ワールドキッズコミュニティは私が代表している団体のひとつでもあるのですが、この団体を中心にしてネットワークをくみまして調査と提言活動をトヨタ財団の助成金で3年間おこなっています[2]。今年は韓国との連携で、

1　その後、インドネシアの政策提言活動や、マルチメディア教材として「自然環境と地域文化との調和 ― コミュニティ防災の視点から」のDVDおよび副読本の作成にもつながった。

2　『バイリンガル環境で育つ子どもたちの言語形成に考慮した教育環境整備事業—韓国との連携で広げるネットワーク構築へ』（トヨタ財団）

両方の国で国際シンポジウムをおこないました。韓国からの関係者をよんだり、こちらから行ったりし、シンポジウムの前後には関係者のラウンドテーブルをしたり、お互いのいろいろな取り組みを視察したりするなどの活動をおこないました。これを教育機関への提言書提出というところまですすめたところです。来年はこの内容をフィリピンに伝えるということを3年目の活動としてすることにしています。

表1　足もとの国際化連続セミナー

多言語化する日本 ― 関西の取り組みから	（2008年10月25日、11月29日）
多言語・多文化社会の魅力と力「日本の将来と留学生」	（2009年10月3日）
多言語・多文化社会の魅力と力 「外国人にお世話になる時代：フィリピン人看護師・介護士からの声」	（2009年10月24日）
多言語・多文化社会の魅力と力 「共生と不安・多文化・多言語社会の課題」	（2009年10月31日）
多文化コミュニケーションイベント「Shake Forward!」	（2010年11月27日）
「体感できる社会対話」シリーズ	（2011年8月6-7日）
「スティーブン・マーフィー重松教授　来日記念講演」	（2012年09月7日）
「ミックスルーツ・アカデミックフォーラム」	（2012年10月27-28日）
多様性が生きる社会とは？ 「多様性を取り込んだ社会参画：世代、分野、性別を超えた明日への提言」	（2013年11月21日）
多様性のミニパブリックス：サミット2014 「私たちの、明日の私たちへの提言」	（2014年2月22-23日）
ミックスルーツ研究会	（2014年7月12日、8月29日）

写真3　『バイリンガル教育を考える国際シンポジウム』韓国・ソウルでの様子

4. コミュニティ・エクステンション・リサーチの共同研究

このようにさまざまなことをずっとしてきたわけですけれども、大学の社会貢献をテーマについて研究成果としてもきちんと位置づけなければならないという提案もしてきました。そこで、グローバル共生グループでは、グローバル化時代の大学の社会貢献のあり方として、コミュニティ・エクステンション・リサーチというモデルを考え、それに関する共同研究を行ってきました。

これは福田さんに教えてもらったのですが、フンデルト・モデルというのがあって、19世紀にドイツでうまれた国民国家型の大学は、研究と教育の二本柱とし、教育では国民国家に資する人材の育成を柱としてきました。しかし、グローバル化の中で、こうした社会の中の大学のあり方を考え直さなければならなくなってきています。もちろん大学は教育の場です。もしくは教員にとっては研究の場でもあります。これに加えて、グローバル化社会に資する人材の育成と結びつけて、新しい柱としての社会連携をしっかりと位置づける。これが私のような実践者がここに関わる意味の一つなのかなと思っています。私が動くことで一石四鳥になってよかったというだけではなくて、これを大学の中に―私一人ではできないことですけれども―何か種をまくことになったらいいなという思いがありました。つまり、大学そのものがグローバル社会の一員として、研究や教育実践だけではない具体的な社会における新たな役割を担うこと、ということなのです。

もう少し積極的に社会的な課題を共有して大学という立場で何ができるのか、NGOと組む、行政と組む、企業と組むというのを社会にかかわることにおいて、地域のなかで何ができるのか。理系では企業と教員が研究として連携することはたくさんあると思いますが、文系は、評価が難しく成果が見えにくい、何をもってそのことの意義があるのかが示しにくい分野です。こうした分野で、いかに大学が社会的な課題を担うのか、試行錯誤、暗中模索の途中です。しかし、こういう役割を担うことが結果的に学生の実践を促進するだけではなくて教員も含めて、実践が教育現場に還元されると思うのです。私自身、こうした要素をGLOCOLの教育プログラムにも取り入れることが必要なのかなと思ってやってきました。私のようにNGO で実践的な活動に携わってきた教員は、そうしたプログラムを実践するためのコーディネーターとしての役割もあるのかなと思います。

コミュニティ・エクステンション・リサーチに関する共同研究では、まず

はグループのメンバーといっしょにコミュニティ・エクステンションのいろいろな先駆的な事例を学びました。

龍谷大学では、そういうことを重点的にしている取り組みがあります。NPO・地方行政研究コースが設置されていて、そこにNGOや行政などの職員が1年で無料で修士がとれる奨学金制度があります。また、地域社会から具体的に提示された課題解決に対して、そのプロジェクトに専門性の高い教員が参加する。もちろん学生もいっしょに行くのですけれども、長いスパンでいっしょに課題を解決する形で取り組んでいます。

また、東日本の被災地まで行きまして、大学がそういった復興のプログラムなどにかかわっている事例をきかせていただきに行きました。石巻専修大学、東北学院大学と国際交流協会側との連携の事例だとかをずっと調査してきました。

しかし、もしかすると発展途上国とよばれるところは、もっと大学に求められることが日本よりも多いような気がするのです。私はこの研究でもまたインドネシアに行ってきました。インドネシアの大学は国立大学に最低2ヶ月間のフィールドワークが義務づけられています。しっかりと地域にでていって地域課題に向き合うことが義務づけられています。そこに専門家として教員もかかわる形でいろいろなことをしています。2つの大学で話を聞いてきたのですが、防災コミュニティづくりや、仮設住宅支援、貧困削減のための家の建築支援、障害者のプログラム、いろいろな地域課題があります。こうした課題にインドネシアでは、どのように大学の教員と学生が関わっているのかを学んできました。

フィリピンでも、セブ島にあるサンカルロス大学、ミンダナ島にあるミンダナオ大学イリガン工科校、レイテ島の東ビサヤ大学における社学連携の取り組みを視察しました。サンカルロス大学では、受刑者が刑をおえて出てきたときに社会復帰するための準備プログラムへの取り組みを行っており、それを視察しました。また、ミンダナ島にあるミンダナオ大学イリガン工科校では、紛争解決、和解、災害など具体的な社会的課題に、どのように大学がNGO、教会と連携し、取り組んでいるのかを学んできました。レイテ島でも、台風ハイアンの被災地で、災害からの復興に対して、東ビサヤ大学がどのような役割を果たしたのかを学びました。

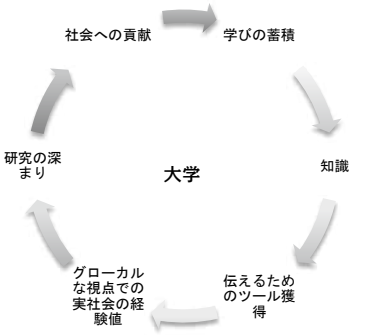
結語――社学連携を通じたグローバル人材の育成における大学の役割と課題

これまで紹介してきたように、GLOCOLでは、実践活動にかかわりながら、研究と教育を行い、社学連携によるグローバル人材を目指してきました。しかし、グローバル人材というのはそもそも何でしょうか。

最初に「グローカルな課題に、グローバルな視点で」ということをいいましたけれども、特にグローバル共生グループでは自分の足もとをしっかりと理解し、コミュニティに参加してしっかりとそのことを考えるという実感と共感をもつようなそういう経験がないと、世界で通用しないだろうと考えています。世界はそもそもコミュニティ、いろいろな町、村の集合体として存在するのであり、世界という大きなものを相手にするというよりもコミュニティの視点で「地の知」を学ぶことが、私たちが世界に出ていったときにはそこで通用する、自分の専門分野のなかで対等にわたりあえるベースになると思っています。

そのためのコミュニケーションのツールを確保する必要があります。安直ないい方ですと英語を学ばないとグローバルではないよという言い方をします。けれども、けっして英語だけではないと思うのです。何か自分の専門性があればツールとしての言語を確保してそれでつながっていける気がします。あとは、文化や価値観の違いを受け入れる寛容性。寛容性というのは、グローバル人材というものを考えるときに一番大事なのではないかと私は個人的に思っているのですけれども―こういったものが必要です。

そのためには、大学というところでは知識、伝えるためのツール獲得の機会を提供することが重要となります。「グローカル」―さきほど常田さんもグローカルという言葉を使いましたが―グローバルでありローカルであるという視点で経験値をいかにもっているのかが、研究の深まりになり、それが社会へ貢献できる知恵や信頼につながって行きます。その貢献の



●自分の足もとをよく理解し、コミュニティに参画して実感と共感をもつ
●世界＝コミュニティの集合体でも通用する『地の知』を背景に、自分の専門分野で対等にわたりあう
●そのためのコミュニケーションのツールを確保する
●違い（文化／価値観等）を受け入れる寛容性をもつ

図1　グローコルのめざすグローバル人材とは？

中で学びが蓄積されて、その学びの中からこんな知識がいる、というサイクルができ、そのプロセスの中でグローバル人材が育っていくのだと思います。そのサイクルの中で実践活動は大きな役割を果たすと思っています（図1参照）。

今後の展望を、課題も含めて最後にまとめてみます。

地域社会が大学に連携しても何がプラスになるのか、役に立つのか、自分たちの活動にとってどういうことをしてくれるのかわかりません。信頼が低いのならば、信頼度を強化することを大学は考えないといけないと思うのです。学生を実践現場に行っておいでと送り出すだけではなくて、しっかりと準備して「この学生が来てくれたことで助かった」と言わせたいし、そのためにはいろいろなマニュアルなども必要かもしれませんが、このような教育はただ「お任せします」ということだけですと、受け入れる側は負担になります。信頼度の強化という意味でいろいろな準備をしないといけないと思います。

実践活動が豊富な教員の確保も必要です。そのためには実践活動の評価が問題となります。国際協力グループの発表でも同じことを言われていましたが、教員の実績に対しては―私もここにきてよくわかったのですが―いくら実践で動いても、何の評価もありません。どれだけ論文を書いて世に出しその論文が引用されるかとか、そのようなところに評価があるのだなと思いました。私の場合はずっとしてきた実践を、ここで新しいものにつなげていきました。そういうことを私は給料をもらってできるわけです。それはとてもありがたいし、その立場をとても有効利用させていただいていると思います。ただそれは私がいるときだけで終わってしまうのでは意味がなく、きちんと大学の中で位置づける必要があります。

もちろんいまは実践の現場にいる人たちを教員として採用するところがとても増えました。しかし、採用した途端にその人たちが実践から離れてしまうことがないような環境づくりを大学でしっかり位置づけるようなことがないと、本当の教育にはつながらないと思うのです。私は何も不満はないです。こうやってここでお給料をいただいて一石三鳥、一石四鳥くらいのことをさせていただいたことはありがたいし、大学の社会貢献の一つとしてそういう実践している人を雇うということも大きな一つの方法かなと思います。

●地域社会の、大学への信頼度の強化

→　学生への実践準備教育・・・マニュアル作成

●実践活動経験が豊富な教員の確保と、実践活動の評価

→　教育カリキュラムに反映

<u>コーディネート機関</u>

●学内の多様な部局の学生／教員と地域社会の各組織をつなぐ

●学生たちのしっかりとした長期間の課外授業の受け皿へ

●高校との連携にも展開

図2 グローバル化時代の大学の社学連携の課題

こういうことが教育カリキュラムに反映される、それにはコーディネート機関が重要になると思います。阪大はマンモス大学でいろいろな部署がありますが、そういう学内の組織をつなぐだとか、学生たちのしっかりとした長期間の受け入れをしてもらえるような信頼関係の構築を行うような機関が必要となると思います。

私の報告はこれで終わりたいと思います。あとでいろいろな質問や意見交換もさせていただきたいなと思います。ありがとうございました。

ディスカッション

司会（常田）　吉富さんどうもありがとうございました。せっかくですので、このあとミックスルーツに関しては対談があるのですけれども、それ以外に本日の吉富さんのお話について何かご質問がある方は、お手をあげてお名前とできればご所属をおっしゃっていただけたらと思います。

吉富　藤本さんなにかありますか。何度かいっしょにさせていただいておりますが。

藤本　ヒューライツ大阪アジア・太平洋人権情報センターの藤本と申します。GLOCOLとは2009年度から2012年度まで4年間にわたって一緒にセミナーを中心に共催セミナーを開催していただきました。ちなみに2009年度は「紛争地の現場から日本社会に問う」というテーマで、世界各地の紛争の問題について研究されている先生方をNGOやNPOの人たちに対して、市民社会の人たちに対して報告して一緒に考えていくというセミナーにな

りました。2010年度は「国際開発協力の現場から日本社会に問う」というテーマで、これは日本のODA（政府開発援助）の問題をいろいろな視点から研究している、あるいはNGOで実践している人たちから報告を受けて、こういうセミナーを3回やりました。2009年度、2010年度、2011年度は吉富さんの前任の石井正子先生と一緒に共催させていただいたのですが、2011年は吉富さんと、さきほどご紹介いただいた「外国人住民はコミュニティ放送の運営に参画できない！？」というテーマで十三の淀川文化創造館というところで市民をたくさん集めて開催しました。2012年度は震災の翌年になりますけれども、1月18日に神戸で福島の人と神戸の人とつながる人とでコンサートとセミナーを開催させていただきました。

私たちヒューライツ大阪は国際的な人権の基準を市民社会に日本社会に伝えていくということをずっと旗頭に活動しているのですけれども、どうしても理屈っぽくなりやすい話をGLOCOLのみなさんと共同開催することで、いっていることはとても学術的なのですが、いま吉富さんがお話されたように、現場の声、立場から実践していくうえで何が大切なことなのか、何を協力してやっていこうかということを具体的な現場の声、人とともに考えあうことができたということで、私たちにとっても活動の励みになりましたし、何か大学に対してもお返しできることもできたのではないかと思っています。

今回GLOCOLのプログラムが終了されるということを聞いて、とてもさみしい思いをしているのですけれども、どうか後継プロジェクトをこれまでの蓄積をつなげていくようなことをしていただけたらと思って今日はご挨拶したいと思います。どうもありがとうございます。

司会　ありがとうございます。

吉富　あと一人だけいいですか。関西NGO協議会の高橋さんとは大学とNGOの連携というかたちでさせていただきました。

高橋　関西NGO協議会の高橋と申します。いきなりご指名いただいてびっくりしたのですが、吉富さんは地域市民セクターのFMわぃわぃさんやFACILさんでもお仕事をされていまして、私ども関西NGO協議会の加盟団体にもなっていただいています。そういった御縁もありましたし、御縁をとおしてGLOCOLに就任されたときに外務省の方から緊急事業なのですが、大学とNGOがどうやって協働していくのか、他セクター同士がどうやって上手にコミットしながら強い地域社会を形成していくのかという視点をもちながら研究会に参加していただいた経緯があります。

さきほどご報告の中にあったのですが、ネガティブな発表があってそういったこともあったなと思いました。たしかにNGOは、特に関西発のNGOはまだまだ規模が小さくて弱いのです。どうしても一人、二人の強い志の人たちの存在によってなりたっているところがありまして、組織としてぜい弱なのです。誤解をいただきたくないのは、大手の大きいアライアンス系のNGOと小さな地域のNGOの活動の質がどうかといったら、けっして劣っていません。非常にいい活動をしています。ただ組織が弱いと資金がなかなか市民セクターへまわってこないというのは事実なのです。そういった組織が大学と連携する場合に、どうしてもやりたくても、1日24時間ない私どもとしてはここまでやりたいのだけれどもどうしてもできないというところがありまして、そのへんの義務感を考えさせられた研究会ではありました。ですがけっして否定的にとらえているのではなくて、まだまだ発展できる分野だと私どもは思っていまして、これは先駆的な試みで、私どもは吉富さんたちと一緒にGLOCOLさんたちといっしょにやってみたのですが、ここで形成された人間関係とか、縦や横の関係ですが、さきほども吉富さんがおっしゃっていましたけれども、そういったものがなかなか目に見えてでてこないのです。とにかく蓄積をして今後の活動の方向につなげていきたいと思います。いろいろな立派なフォーラムがならんできましたけれども、そのタイトルだけではなくて、その裏には大きな財産というのをGLOCOLは作ってくださったと思っていますし、それに私ども市民セクターで働く者にとりましては、高度な研究をされている研究者と、実践をして歯を食いしばりながら地域でがんばっている市民セクターをつなげていただく架け橋になってくださったと思っています。プログラムとしては終了されるのですが、一つ残していただきました財産を私どもも大切にさせていただきたいと思っております。ありがとうございました。

吉富　ありがとうございます。

司会　それでは、吉富先生からの報告はここまでとさせていただき、コメントや質問のある方は、後ほどの全体討論の際にお願いしたいと思います。吉富先生と発言者の方々、どうもありがとうございました。